

五、結論

九州以外の都市から九州の都市を見るとどうであるか。

中国地方の下関市・山口市はどう見ても九州の諸都市と言語的に近いとは言えない。辛うじて下関市と大分市が近いと言えるくらいである。これは山陽道を通じて、上方から文化が流れてきているという考え方をほとんど受け付けないかと思われる。上方からの言語は、むしろ瀬戸内海を通して伝播してきたようで、それは、拙稿Bからもうかがわれる。

四国地方の松山市・高知市は中国地方の二都市と較べて、比較にならないほど九州の諸都市と言語面で近く、これは、全くの予想外であった。

九州の場合、従来の説、つまり東九州（北九州市・大分市・宮崎市）・西九州（熊本市・佐賀市・長崎市）・南九州（鹿児島市）と三つに大きく分類できる事が裏付けられた。また、福岡市は西九州と東九州と

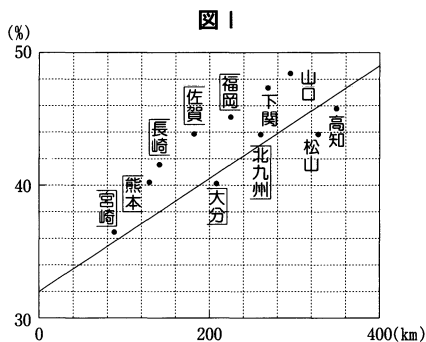
の橋渡しの存在である事も証明できた。

東九州は西九州との関係は薄く、方向としては四国の方を向いていると言える。両者で一つの言語圏を構成しているようである。

西九州は言語的に孤立の度合いが強く、ここがいわゆる九州方言の典型といわれる地方と言える。

南九州（鹿児島市）は九州の他の地区との交流は少なく、孤立の度合いは西九州よりもさらに強い。別の表現をするならば、言語的独立の気配が濃い地区である。

図1 鹿児島市から見た場合



全体として直線Cより大きく上方に振れている。つまり言語的に閉鎖的と言えるであろう。九州以外の都市・中国地方山口県の下関市・山口市は直線Cより結構上方に位置し、四国の松山市・高知市は直線Cよりやや下方に位置する。やはり、中国地方より四国に言語的に近い。直線Cより下方に位置す

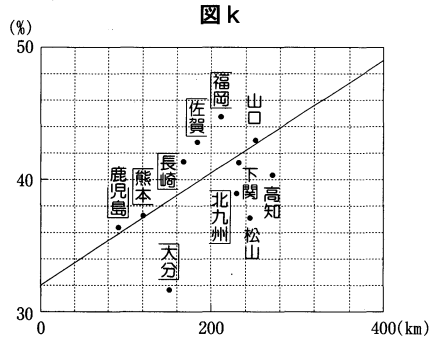
るのは大分市を除けば四国の松山市・高知市だけである。

東九州の場合、大分市は直線Cよりほんの少し下方に位置し、北九州市は直線Cより少し上方に位置する。もっとも鹿児島市に近い宮崎市は直線Cより少し上方に位置する。宮崎市より大分市の方が下方に位置するのは、鹿児島市とこれらの都市の交流が陸続きよりもむしろ海を通じて行われたと推察できる。

西九州の場合、熊本市・長崎市・佐賀市・福岡市はそれぞれ直線Cより上方に位置し、交流が深いとは思えない乖離の度合いである。

鹿児島市は地図から見ても分かるように、ほかの九州の諸都市とは陸伝いの交流は成立しにくい位置にある。ここからの他都市との交流はやはり海に頼らざるを得ず、その結果、大分市・松山市・高知市などが直線Cより下方に位置するようになったのであろう。又、鹿児島市が西九州の方を全くと言っていいほど向いていないのは面白い。言語的に独立・閉鎖の色が濃い。

図k 宮崎市から見た場合



全体として、特に閉鎖的でも開放的でもない。九州以外の都市・四国の松山市と高知市は直線Cより結構下に位置し、特に松山市は下方への乖離度が大きく、この四国の二都市と言語的に近いと言える。これに対して中国地方山口県の下関市・山口市は直線Cの間近にあって、特に近しくも疎遠でもない。

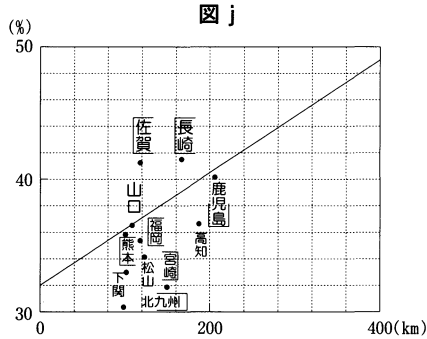
東九州の場合、大分市は直線Cよりぐっと下方に位

置し、非常に言語的に近い事が分かる。同じ北九州市も結構下方にある。しかし北九州市は海を隔てた松山市と比してはるかに言語的に疎遠であり、直線からの乖離度で言えば、高知市の方が北九州市より下方への乖離度が大きい。

西九州の場合、熊本市・長崎市・佐賀市は直線Cより上方にあり、しかも距離が遠くなるほど上方への乖離度が大きくなる。福岡市はさらに上方へ乖離している。西九州の方を向いてはいない。

南九州の場合、鹿児島市は直線Cより少し上方に位置する。宮崎市に地理的に最も近いに関わらず、東九州の二都市、四国の二都市と較べて、乖離度の面から言って全く、かなわないし、相違度それ自体を較べても、ほぼ三倍の距離の松山市とほとんど同じである。宮崎市は九州の中にあつて言語的に東九州・四国へ向いているようである。

図 j 大分市から見た場合



全体として直線Cより大きく下方に振れている。言語的に非常に開放的と言える。

九州以外の都市・中国地方山口市は直線上に位置、下関市はかなり下方に位置、四国の松山市・高知市もともに大きく下方に位置している。これは、大分市と九州以外の海をはさんだ都市が言語的に非常に近い、つまり海上交通が盛んであった(ある)事を物語って

いる。

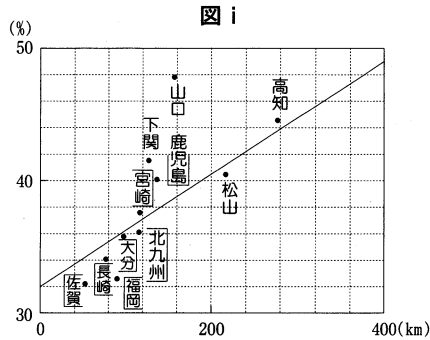
東九州の場合・北九州市が下方への乖離が最も大きいのは二豊地区(豊前・豊後)として歴史的・地理的につながりが大きかった事を物語っている。宮崎市もかなり直線より下方に位置している。

西九州の場合、佐賀市・長崎市が直線Cより大きく上方に乖離している事が目立つ。西九州の中でも極西といってもいいこの二都市との交流の無さが際だつ。福岡市は直線Cの下、熊本市はほんの少しだけ下に位置する。福岡市・熊本市の相違度の絶対値も福岡市の方が小さく、この点面白いと言えよう。

南九州の場合、鹿兒島市は直線Cよりほんの少し下方に位置する。大分市が言語的に開放的な都市である事を考えると、大分市と鹿兒島市は言語的に親しいとは言えないと思われる。

大分市は北九州市・宮崎市とともにその東側の海を挟んでの中国・四国と言語圏を形成している。西九州・南九州の方を向いているとは言えない。

図1 熊本市から見た場合



熊本市の場合、近くの都市は直線Cより下、遠くの都市は直線Cより上で、地理的距離を強調した配置になっている。

九州以外の都市・中国地方山口県の山口市と下関市は直線Cよりかなり上、特に山口市は乖離の度合いが大きい。四国の高知市・松山市はそれぞれ直線Cの少

し上、下に位置する。この二都市は山口県の二都市のと較べれば乖離度は小さい。

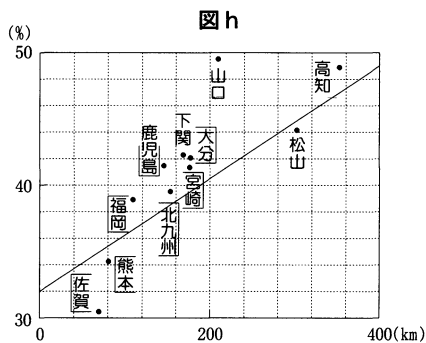
東九州の宮崎市・大分市・北九州市は直線Cの間に位置する。北九州市がやや下方への乖離度が大きい(言語的に近い)。

西九州の佐賀市・長崎市は共に直線Cの下に位置、特に佐賀市は乖離度が大きい。また福岡市との言語的結びつきはかなり強いと言えよう。

南九州の鹿児島市は直線Cより上に位置する。

全体として見ると、熊本市は同じ西九州の佐賀市・長崎市・福岡市に対して近く、西九州の都市としての特色が極めて濃い。そして、東九州の大分市・北九州市・宮崎市がそれに続いて近く、さらに、鹿児島市・松山市がとりまき、その廻りを山口県の下関市・山口市・高知市などがとりまいている。松山市・高知市の位置が直線Cから大層近いことから、中国地方より四国に近いと言える。

図 h 長崎市から見た場合



全体に直線Cより上方に多くの都市が分布して、言語面ではかなり閉鎖的でよその都市との交流が少ないと言える。

九州以外の都市：西中国地方山口県の山口市・下関市はともに大きく直線Cより上方に振れている。特に山口市はその度合いが大きい。四国の松山市・高知市

は松山市が直線Cよりやや下方、高知市がやや上方に位置し、この四国の二都市はほかの九州の都市から見た時より明らかに疎遠である。

東九州の都市は大分市・宮崎市・北九州市どれも直線Cより上方に位置、積極的に深い間とは言えない。

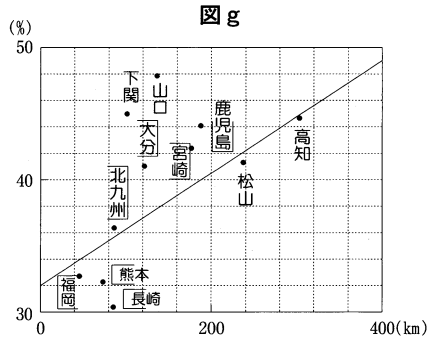
西九州の佐賀市・熊本市は九州では唯一直線Cより下に位置しているが、熊本市よりも同じ肥前の佐賀市が言語的に本場に近いと言える。

福岡市も直線Cより上方に位置、決して近いとは言えない。

南九州の鹿児島市も結構上方に位置、言語的に疎遠と言えるだろう。

佐賀市と熊本市を除くほとんどの都市は言語的に遠いか、あまり近いとは言えない都市ばかりで、西九州の中でも特に九州最西端の位置を反影していると言える。

図 g 佐賀市から見た場合



全体として見た時、直線Cより上方に位置する都市の方が多し。言語的に開放的な都市とは言えない。九州以外の諸都市・中国地方山口県の下関市、山口市が直線Cよりかなり上方に位置している。四国の松山市、高知市はほぼ直線C上に位置している。福岡市の場合と同じように言語的に西中国とは疎遠で、四国

の方がかえって近しい。

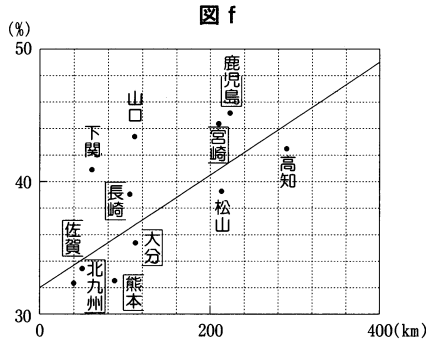
西九州の都市は、同じ肥前の長崎市、肥後(同じ肥州)の熊本市ともに直線より下に位置し、特に長崎市との言語的近しさが目立つ。地理的には最も近い福岡市もそれに次いで近しい。

東九州の都市の場合、大分市・宮崎市が直線より結構上に位置し、言葉の類似度は少ない。一方、北九州市はほぼ直線上に位置し、松山市・高知市などと似た関係にある。大分市の位置を福岡市の場合と較べると、一気に疎遠になっているのが面白い。

南九州の鹿児島市は福岡市の場合と同様に、あまり交流は深いとは言えない。

全体として見ると、長崎市・熊本市・福岡市との深い交流が見られ、それ以外はあまり言語的に近い都市は見当たらず、西九州での結びつきが深い。

図 f 福岡市から見た場合



全体として見た時、直線Cから上方に大きく乖離した都市が目立つ。特に開放的とも言えないが、閉鎖的とも言えない。

九州以外の都市・面白いのは中国地方山口県の二都市山口市・下関市が直線Cのかなり上方にあって、四国の松山市・高知市が同じく直線Cのやや下方にある事である。常識的には山口県の二都市との交流の方が

四国の二都市との交流よりも頻繁に思えるが、グラフ上でそれは読み取れない。特に下関市と高知市とがあまりその異なり度が変わらない事が驚かれる。

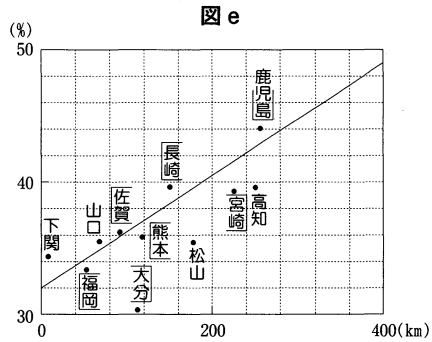
東九州の都市のうち、北九州市・大分市は直線Cより下方にあり、宮崎市は直線Cよりやや上方にある。

西九州の都市のうち、佐賀市は直線Cよりやや下、熊本市はそれよりもっと下、ところが同じ長崎市は直線よりやや上方にそれぞれ位置する。結果、福岡市が似たような距離に位置する熊本市とは交流が深いのに長崎市とは浅いという興味深い結果が得られる。

東九州の三都市（北九州市・大分市・宮崎市）、西九州の三都市（佐賀市・熊本市・長崎市）とを見比べると、福岡市が地理的位置同様に言語面でも東九州と西九州との丁度中間に位置する事が分かる。

南九州の鹿児島市は宮崎市同様、直線Cより少し上方に位置し、交流のあまり無い事がうかがえる。鹿児島市・宮崎市共に南九州と考えると、南との交流の薄さというものが見とれるわけである。

図 e 北九州市から見た場合



直線Cに対して上方・下方にそれぞれ同じくらいの数の都市が分布しているが、大きく見ると、全体には下方に振れている。これから言語面では開放的な都市だと言えよう。

九州以外の都市…山口県の下関市・山口市は直線よりやや上に位置する。その非常に近い距離に比して言語的に近いとはあまり言えない。一方、四国の松山市

と高知市は直線Cからかなり下方に位置している。この二都市がかなり下方に位置しているのは、間に海があるからと考えられる。山口県(中国地方)の下関・山口両市は同様に間に海があるが、この場合は距離が近いためにそれが言語交流の妨げになっているためと思われる。

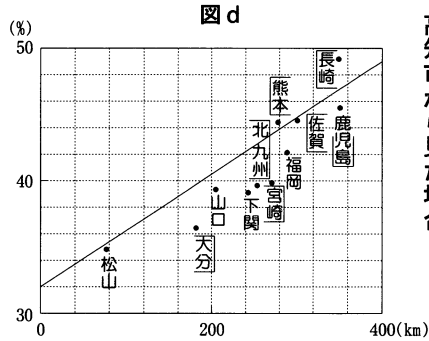
東九州の都市、大分市・宮崎市共に直線Cよりかなり下に位置する。つまり、同じ東九州の北九州市と言語の交流が盛んだという事である。特に大分市はかなり言語的に近いと言えよう。

西九州の都市、西から長崎市・佐賀市・熊本市は順に直線Cに近いところで乖離度がプラスからマイナスになる。福岡市もその延長にあると言える。

南九州の鹿児島市は直線Cの少し上に位置する。西九州と南九州はこの北九州市から見て概ね直線Cに非常に近い所に位置すると言えよう。

全体として、北九州市は東九州とそれ以东を向いていると言えよう。

図 d 高知市から見た場合



全体としてほとんどの都市が直線Cより下に位置している（例外は熊本市と長崎市だけ）。よって、本稿で取り上げる都市に対して高知市は閉鎖的であるとは言えない事が分かる。

西九州の都市は長崎市、熊本市が直線より上に位置し、これは地理的位置からもうなずける。佐賀市はほとんど直線Cに近い。長崎市の上方への乖離度がやや大きい。全体の中ではやはりこの三都市は相違度が

大きい。福岡市は直線Cのやや下方でほかの三都市よりは近いと言えることは面白い。

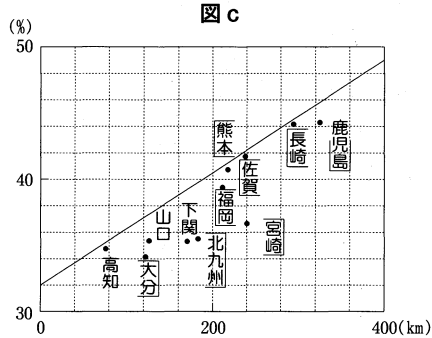
南九州の鹿児島市は直線よりやや下に位置。言語的に疎遠とは言えない。

東九州の北九州市、大分市、宮崎市はそれぞれ直線Cより同じくらい下方に位置している。高知市とは言語的に近いと言える。

九州以外の都市・同じ四国の松山市は直線Cのすぐ下。距離・位置の割に言語的に特に近いとは言えない。山口県の山口市・下関市は共に直線Cの下だが、下関市の方が倍以上の乖離度である。これは下関の海都としての性格のためか。

高知市の地理的位置から考えると、これほど直線Cより下方に位置している都市が多いということは、やはり、かなりの驚きである。この高知市も松山市同様海都としての性格が強いようである。そして陸続きの松山市との言語的距離が近くないのが、その事を一層裏付けている。

図c 愛媛県・松山市から見た場合



図を見たらすぐ分かるように、すべての都市が直線Cより下に位置している。これは松山市がここで問題にしているすべての都市に対して開放的である、もしくは閉鎖的ではないと言えよう。これは松山市の地理的位置から、他の都市とはほとんど全く海を介してしか交流が持てない事を考えると、海が言語の交流に及

ぼす影響力というものがよく分かるであろう。つまり海は言語交流の妨げには殆どならないという事である。

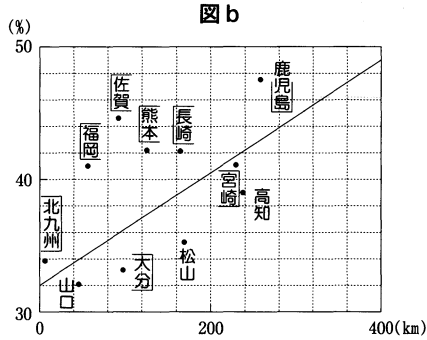
西九州の長崎市、佐賀市、熊本市はさすがに直線Cの直下にある。福岡市はそのやや下方。この四都市は直線Cからの乖離度が少ない。

南九州の鹿児島市は福岡市と同じくらいの乖離度。

東九州の宮崎市、北九州市、大分市はそれぞれかなり直線より下に位置していて、交流の深さをうかがわせる。特に宮崎市の下方への乖離の度合いは大きい。

九州以外の都市・山口県の山口市と下関市は共に下方に位置し、距離に比しての下関市の近しさが分かる。高知市は直線Cにかなり近く、同じ四国内の都市であるのに、さほど言語的に近いとは言えない。高知市はここでは唯一地続きの都市であるのを考えると面白い。

図 b 下関市から見た場合



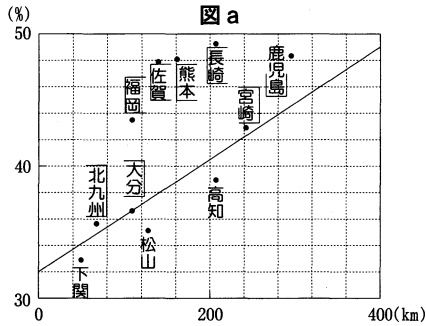
西九州の四都市長崎市、熊本市、佐賀市、福岡市は相当直線Cより上に位置し、言語的に疎遠であると言える。中でも佐賀市が特に直線からの乖離が大きい。それより遠い長崎市が言語的距離が近いのは面白い。南九州の鹿児島市も同様に言語的に疎遠である。東九州・北九州市は下関市の対岸で距離も9キロし

か離れていないという地理的位置を考えれば、少なくとも直線の下に位置していてもいいと思われる。それにしても同じ東九州の大分市はもっと距離は遠いのに、言語の相違度は北九州市よりも小さいのは面白い。宮崎市は直線Cにかなり近く、やや下に位置する。九州以外の都市・すべて直線Cより下に位置。陸続きの同じ山口県の山口市よりも、海を隔てている松山市や高知市の方が直線からの乖離度が大きいのは面白い。これは大分市などと同じように海がかえって交通の便を助けていると思われる。逆に、例えば北九州市のように距離が近い場合はこれは交流の妨げになるのかも知れない。つまり、距離が近い場合は海は交流の妨げになるが、ある程度の距離が離れている場合は、海は逆に陸続きの場合より交流は盛んである要因かも知れないという仮説がここで立てられる。これは追って検証されよう。

図 a 山口市から見た場合

グラフにおける囲みは次の如き意味を表わす。

- ・ 天分は東九州を表わす。
- ・ 長崎は西九州を表わす。
- ・ 鹿児島は南九州を表わす。



直線Cより上方に位置する都市がほとんどで、本稿での十二都市の中で孤立の傾向が強い。

西九州の長崎市、熊本市、佐賀市は直線からかなり上方に位置する、つまり言語的に疎遠である。福岡市はその三都市の少し下に位置するが、やはり交流は薄く他都市に比べると大きく上方に位置する。西九州全

体との交流が希薄であることが際立つ。

南九州の鹿児島市も西九州同様に言語的に疎遠。

東九州の宮崎市、大分市、北九州市は西九州に比すればさほど疎遠とは言えない。

東九州との言語的距離感がそれほど無いという事は、間にある海が交通の妨げには余りなっていないという事を示している。西九州との言語的隔たりを見ると、海よりも山脈の方が交通の妨げになる場合もあると言えよう。

九州以外の都市…直線より下にあるのは四国の高知市と松山市、同じ山口県の下関市。山口市が言語的に九州より東の方角を向いているという事が分かる。

直線Cの下方に位置するのは右の中国・四国地方の三都市だけであるという点に大きな特徴がある。さらに東九州の三都市が直線Cから上方への乖離度が極めて小さい点、西九州・南九州の上方への乖離度が極めて大きい点も大きな特徴と言える。

の理由を述べている。

この表 I から得られるデータで、平均として何キロ離れば何%言葉が異なるかの平均を出したい。そこでこの統計を処理するのに単回帰分析を利用してみると、次の式が得られる。

$$Y = 32.80410 + 0.04046X \quad (\text{相関計数 } 0.6735)$$

Y は予測値 (基準地点と何%言葉が違うか、その値)

X は距離 (基準地点とある地点との直線距離)

相関計数を八〇%以上に引き上げたいので、誤差が±五%を越えるものをカットして再び計算し直すと、次の式が得られる。

$$Y = 31.90280 + 0.04330X \dots \text{式C}$$

(相関計数 0.83215)

相関計数が八〇%を越えるので、この式Cを採用する事にする。

次に表 I から得られるデータと式Cを次節にあげる図 a ~ 図 I に書き込んで、考察に移りたい。

四、考察

図 a ~ 図 I を見ると、式Cで表される直線よりある都市は上にあり、ある都市は下に位置している。この直線Cはここで取り上げる都市間で直線距離に対応して言葉がどの程度異なるかという事の標準を示すものである。さらに、ある都市を示す点が直線より上に位置すればする程標準よりは言葉の相違が大きい事を表し、直線より下に位置すればする程逆に言葉の相違度が標準より小さい事を示している。又、上に位置する都市の数が下に位置する都市の数より多ければ、その図の都市は言語の上で閉鎖的である事を表す。逆に、下に位置する都市の方が多い場合は、言語的に開放的である事を示す。

以下、各図を検討して行く事にしよう。

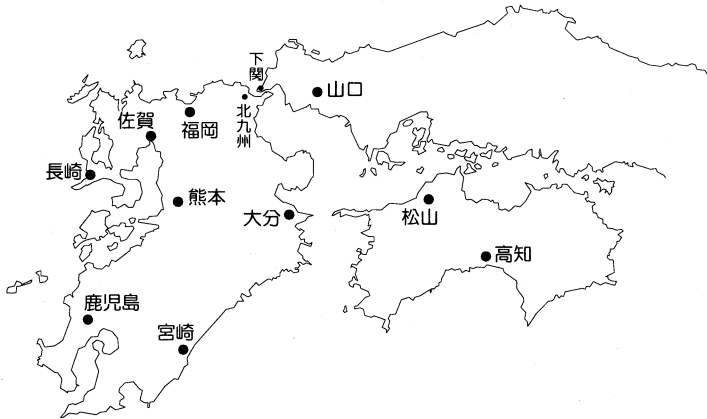


表1 二地点間の相達度の点数化及びその百分率／二地点間の距離(km)

	山口	下関	松山	高知	北九州	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島
山口		32.7 799	35.3 860	39.5 963	35.1 860	43.8 1,069	48.0 1,172	49.7 1,212	48.2 1,175	36.7 895	43.1 1,053	48.4 1,182
下関	51		35.4 864	39.2 956	33.9 828	41.3 1,007	44.9 1,095	42.2 1,031	42.2 1,029	33.4 816	41.3 1,008	47.6 1,162
松山	131	173		35.0 854	35.6 869	39.5 964	41.7 1,018	44.2 1,078	40.8 995	34.3 837	36.7 896	44.1 1,075
高知	209	248	78		39.7 968	42.3 1,032	44.9 1,096	49.5 1,208	44.6 1,088	36.9 900	40.0 975	45.9 1,121
北九州	62	9	180	255		33.5 817	36.0 878	39.8 971	36.1 881	30.4 741	39.4 962	44.1 1,075
福岡	111	60	219	291	51		32.4 791	38.9 949	32.5 792	35.6 869	44.7 1,090	45.2 1,103
佐賀	144	96	239	305	87	41		30.4 741	31.9 779	41.5 1,013	42.5 1,037	44.1 1,075
長崎	210	164	294	353	155	107	68		34.3 837	42.0 1,025	41.6 1,015	41.7 1,018
熊本	162	129	222	279	122	93	63	77		36.0 878	37.5 915	40.2 980
大分	105	102	128	185	104	117	122	168	96		31.9 779	40.2 980
宮崎	249	231	248	272	228	210	183	171	119	149		36.5 890
鹿児島	296	264	324	356	257	224	186	143	135	207	89	

う点に疑問を抱き、都市のみを扱う事に否定的な見解を抱く向きもあるかと思われ、自明の理とも思われるが、その事について一言する必要がある。

言葉は文化の中心地からその文化と共に地方に広がって行くものであるが、その時、受け入れる側としての地方も、その各々の地方の中でより大きな求心力・発信力のある都市にその言語情報が集中して伝わってゆく。そして、さらにそこからそのまわりのより小さな町やさらには村に言葉が伝わってゆく。であるから、

この論文で取り上げるような広い範囲での言葉の伝播という点からお互いの言葉の比較をするときは、まず大きな都市相互間の比較をしないと、広域での言葉の大きな流れがつかめない。小さな町・村を取り上げて、それを相互に比較する事も当然それ独自の意味があるのであるが、それは一旦、大都市間の比較をしたあとからでないといけない。何故なら、小さな町・村に言語が伝わって来るのは、右に述べたように、中心城市から地方都市へ、さらに地方都市から近傍の町村へと

いう二つの段階を経て伝わってくるのであるから。つまり、伝播速度の違う二つの区間があるので、町・村という小さな単位の広域における直接比較はそこまでの二つの伝播速度の異なりを考慮する事が要求される。分また複雑な手続きが必要になると考えられるから。

三、九州地方八地点の点数化による結果及び分析

この第三節では、九州地方八地点と中・四国の四地点とを合わせたの分析を行う。

表 I 右上の半分は前節にあげた方法で各地点間相互の言葉の相違度を点数化し合計した点数、及びそれを二四六〇点(二四六項目×十點)で割りパーセントで表した相違度である。

表 I 左下の半分は各地点間の直線距離(km)を示したものである。二地点間の距離に道路距離などではなく直線距離を採用した理由については拙稿 B の注にそ

は最も近い地点での報告を利用するという解決方法をとる事にした。

右の各地点で、日本言語地図のある項目の共通語に對してそれを何と言っているかを抜き出し、各地点相互の言い方を比較、その相対的違いを十点満点で点数化し、その点数を総計したものを「十点×項目数」で割ると、ある地点から見たとときのほかのそれぞれの地点との言葉の違いが点数化される。これによって比較検討する地点間の相対的な関係が客観的なパーセントという数値になって示されるわけである。

以上の事を具体的には次の如き方法で進めてゆく。

まず、語彙なり音韻なりの相対的違いの点数化であるが、この作業をできるだけ客観的に行うために次の基準を設ける。

語彙

○点 同じ語形の場合

二点 語尾のみ異なるもの

四点 同系統にはいると思われる場合の最低点

同系統の語が複数有る場合の最低点

六点 同系統と異系統の語が同時にある場合の最低点

八点 異系統の語が複数あり、そのうちの一つの

語尾のみ共通の場合

十点 全く異なる語形の場合

音韻

○点 発音が同じ場合

五点 似たような発音であるが、音価が少し異なる場合

十点 音価が全く異なる場合

以上、これらを基本にしてあとはそれぞれの相違の程度に応じて点数化する。

ここで、本稿で取り上げ比較する地点が県庁所在地のような大きな都市のみであり、言葉の変化がより緩やかでそれだけその地方の方言としての姿を保っている例えば郡部の地点などをまったく取り上げないとい

崎市・熊本市・鹿児島市・宮崎市・大分市)に県庁所在地ではないが大都市である北九州市(調査当時小倉市)を加えた都合八地点を取り上げる。

日本語地図における地点番号は

北九州市	7303.75
福岡市	7321.46
佐賀市	7341.42
長崎市	7279.93
熊本市	7372.27
鹿児島市	8342.51
宮崎市	8325.56
大分市	7346.54

それ以外では海を隔てた九州に近い地点、つまり

中国地方からは北九州市の対岸になる下関市と県庁

所在地山口市

下関市 7303.17

山口市 6385.98

四国地方からは愛媛県松山市と高知県高知市

松山市 7401.60

高知市 7424.61

の四地点を取り上げる。これら九州・中国・四国を合わせた合計十二地点が対象となる。

中国地方と四国地方を加える事により、九州地方だけの相対的な関係だけでなくそれ以外の地域との相関関係がわかり、九州地方をより客観的に見る事が出来る。下関市を取り上げたのは、北九州市と海を隔てた位置にあつて、しかもその海上間の距離が非常に小さく、そのわずかな海上の距離というものが言葉の伝播にどのような影響を与えるかを見たかったためである。海を隔てた距離が大きいものはそれ以外の例えば大分市と松山市、鹿児島市と高知市、北九州市と松山市など多くの場合がある。

各地点の地点番号を右にあげたが、必ずしもすべての項目にわたり、その地点での報告がなされているわけではなく、その場合、改善の策として同じ市内の別地点での報告がある時はそれを利用、それも無いとき

九州方言の統計的研究

— 日本言語地図を利用して —

稲川 順一

一、はじめに

拙稿「九州方言の分類と位置」(以下拙稿A・「語文研究」H四第七十三号・九州大学国語国文学会)は「日本言語地図」に出ている言語資料をもとに書いたものだが、そこではデータの分析に統計的手法を使わなかったもので、今一つ踏み込んだ解析が出来なかった。その次の拙稿「四国方言の分類と位置」(以下拙稿B・「国文研究」H五第三十八号・熊本女子大学国文談話会)においては回帰分析を取入れ、面白い結果を得る事が出来た。

今回拙稿Bで用いた回帰分析の手法を用い拙稿Aのデータ内容を新たに分析し直す事にし、合わせて、別の視点からの見直しを加筆してここに示す事にした。

その結果、ある二地点の同じ時点での言語面における統計上の親疎関係は一定・静的であるわけではなく、比較のために視野に入れる地点の数やその地理的広がりによって変化しその関係が動的である事がわかった。

二、方法

以下、方法については最初にあげた拙稿A・Bなどと重複するところもあるが、必要と認められるものは再述し、また新たにつけ加えるところもある。

◎対象とする地点

九州からは各県の県庁所在地(福岡市・佐賀市・長